学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

ドイツの音楽科教育および「ムジークシューレ」について -
シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州・アーレンスブルクの事例から -

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-09-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤山, あやか
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000049

ドイツの音楽科教育および「ムジークシューレ」について

– シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州・アーレンスブルクの事例から –

General music education for children and “Musikschule” in Germany

- Overview of the musical activity in Ahrensburg, Schleswig-Holstein -

藤山あやか

Ayaka TOYAMA

キーワード：音楽教育・課外音楽活動・器楽

幼少期および児童期は、人間形成の基礎を培う重要な時期であり、心身の発達の中で豊かな感受性を育てるために音楽は欠かすことのできない役割を果たしている。本稿で取り上げるドイツの音楽教育は、地域社会と連携し学校教育の枠組みを超えた音楽活動が展開されており、とりわけ、幼年期から 10 歳程度までの音楽教育における取り組みは、世界的に見ても極めて充実している。著者は、2017 年 10 月に北ドイツ、ハンブルク近郊に位置するアーレンスブルクのシュトルマーンギムナージウム "Stormarn Gymnasium" と、同ギムナージウムの施設を借用して音楽教育を実施しているアーレンスブルク音楽学校 "Ahrensburg Musikschule" を訪問し、初等音楽教育の実際について調査を行った。本稿においては、現地調査を行った教育機関、特に公的支援の音楽学校 "Musikschule" の取り組みを中心に、その成果や課題について報告する。

1．ドイツ連邦共和国の学校音楽教育

ドイツは特に東西統合後、近隣諸国の移民の増加が社会問題となるなど、歴史的に移民社会の背景を持っている国である。異なる言語、文化、民族、宗教や慣習の違いから社会的孤立や疎外感を感じる移民、あるいはその子孫も多く存在する[1]。このように現代社会の中核となる問題を解決する手立てとして、音楽を切り口として多様化する価値観を尊重し、共存社会の形成の実現を目指す教育活動の展開が期待されている。すなわち、「言葉を必要としない言語」であり、言葉を介さずとも誰もが「時間」と「場所」を共有できる音楽は、その表現活動により一つのものを創り上げる協働作業を通して個々の多様な価値観を理解し合う手段として、極めて大きな可能性を持っていると言える。とりわけ、幼児・初等教育における音楽の役割は非常に重要視されており、子どもたちの教育環境については、学校教育にとどまることなく、地域社会と連携した課外学習の実践と関連づけ、包括的に教育活動を支援するあり方とその発展性を示している[2]。

同国では一般的に、初等教育は基礎学校 "Grundschule"

1 旧西ドイツ（ドイツ連邦共和国）では、例えば 1960 年代以降多くのトルコ人が労働力として移住してきた。

2 Ministerium für Schule und Berufsbildung des Landes Schleswig-Holstein, "*Fachanforderungen Musik　Allgemein bildende Schulen Sekundarstufe I*", Kiel 2015, p. 20

において４年間行われ、その後、基幹学校 "Hauptschule" 、実科学校 "Realschule" 、ギムナージウム "Gymnasium" のいずれかの学校へ進学する。また、全 16 州において、カリキュラムを含めた教育政策の決定権は各州に委ねられているため、その教育制度や学校体系は州によって異なる。一方で、「PISA ショック[3]」に対する教育政策的対応として常設各州文部大臣会議[4] "Kultusministerkonferenz, KMK" の決議により「教育スタンダード "Bildungsstandards"」が導入され、ドイツ全州で教育に関する統一的な教育課程基準が定められた。これは特定の教科を対象としており、音楽科においては共通の学習到達目標が示されていないが、各州で「教育スタンダード」を念頭に置いたカリキュラムが作成され、その学習指導要領に基づく音楽科教育が展開されている。

調査研究を行なったアーレンスブルクはシュレスヴィヒ=ホルシュタイン州に属しており、本稿ではシュレスヴィヒ=ホルシュタイン州のカリキュラムを参考に音楽科教育の取り組みについて考察する。同州においては、「音楽科目カリキュラム "Fachanforderungen Musik"」の中で音楽科教育の指針が示されており、「音楽科目カリキュラムの解説書 "Leitfanden zu den Fachanforderungen Musik"」で、その教授方法の実践例が示されている[5]。また、同州の各校種すべてのカリキュラムでは、「総合的学習」にあたる「教科間連携 "fächerverbindend" 」と「諸教科にわたる学習 "fächerübergreifend"」[6] に関して詳細な説明が示されており、諸教科との関連性を持った包括的な学習を行うことが求められている。特に、中等教育段階の教育カリキュラムについては、「各教科間において関連性を図る取り組みを実践するなかで、その教育課程の編成方針の策定および持続可能な開発を進めること[7]」と、教育スタンダードの原則に基づいたカリキュラムの構築を検討する必要性が明記されている。

ここでは、シュトルマーンギムナージウム（中等教育機関）および、アーレンスブルクムジークシューレ（公的支援の音楽学校）における教育活動の実際について、現地調査を実施した成果をもとに例示し紹介する。

２．「シュトルマーンギムナージウム」における音楽授業の一例

はじめに、シュトルマーン学校とアーレンスブルク音楽学校の概要を示す。

シュトルマーン学校は、９年制の中等教育機関であり、主として大学進学者のための学校である。そして、当学校の施設や備品を借用して教育活動を行っているのが、アーレンスブルク音楽学校である。

ドイツでは、幼少児から高齢者まで幅広い年齢層を対象に活動する公的支援のムジークシューレ（音楽学校）があり、これは、たいていの市町村に設けられている。例えば、児童・生徒はそれぞれの学校での通常授業が終わった後にムジークシューレに通う。運営面については、ほとんどが各州の予算から計上されているため、わずかな受講料でプライベートレッスンを受けることができる。日本では、学校教育における課外活動の一環として部活動があり、通常、放課後に学校施設を利用してさまざまな活動が行われている。これは、教育課程との関連を図りながら行う教育活動の一つであるが、ドイツにおける課外活動は、施設運用については密接な関係を持っているものの学校教育とは切り離された組織によるものであり、いわゆる部活動ではない。したがって、音楽学校所属の生徒はかならずしも同学校の所属の生徒ではなく、他の学校の生徒、あるいは児童も音楽学校で器楽や声

---

3 経済協力開発機構（OECD）による国際学力調査（PISA）の結果で、ドイツの学力不振が明らかとなり社会に大きな衝撃を与えた。

4 教育政策以外にも、文化政策の側面も包括している。

5 中等教育段階（第７～10 年生）の教育カリキュラム *"Allgemein bildende Schulen Sekundarstufe I"* を対象とする。

6 伊藤真, 「ドイツにおける音楽科教育に関する一考察（５）‐音楽科と他の諸教科との関連性に着目して‐」, 広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要第 19 巻, 2007, p. 36, 伊藤氏は、同論文の中でこの用語を使用している。

7 Ministerium für Schule und Berufsbildung des Landes Schleswig-Holstein, p. 7

楽のレッスンを受講し、さらに、後述するオーケストラや合唱などに参加している。

まずは、参観したシュトルマーン学校の音楽科の授業について概要を述べる。

（1）７年生の歌唱の授業[8]

本授業は、黒人霊歌 "Somebody's Knocking at Your Door"（誰かがあなたのドアを叩いている）を題材とし、歌唱、リズムソルフェージュ、アンサンブルなど様々な面からアプローチした音楽活動である。

最初に、取り上げる楽曲と同じ４分の４拍子の様々なリズム打ち練習から始まり、生徒たちが即興でいくつかのリズムパターンを手拍子で叩く活動を行なった。特に４分音符、４分休符については十分に理解をさせたうえで、それぞれの音符の長さや組み合わせについて実際に拍を取りながら学習した。続いて、"Somebody's Knocking at Your Door" の各フレーズの最後（第４、８、12、16 小節目）に入るリズム創作を行い、生徒がいくつかのリズムパターンをホワイトボードに記譜した[9]。

また、記譜されたリズムを打奏する際に、テンプルブロック "Temple Block" が用いられていた。これは、ドイツの打楽器メーカーであるゾノア社 "SONOR" の製品であり、ドイツの作曲家・音楽教育者であるカール・オルフ Carl Orff (1895-1982) の音楽理論に基づき製作された打楽器である。今回、用いられていたテンプルブロックも、"Sonor Orff" シリーズとして開発された打楽器で、音色の異なるウッドブロックが１台につき５つ取り付けられており、音色にも変化をつけるなどの工夫をさせながらリズム打ちを行うことが可能である。本授業では、テンプルブロックを２台用いて、生徒に１小節ごとのリズムパターンを交互に模倣させ、リズムの特徴のみならず、音色に対する興味も引き出すことができていた。授業のまとめでは、指揮者を立て、これら提案されたリズムパターンと楽曲を組み合わせた合奏活動が行なわれた[10]。

平易なリズムから複雑なリズムまで様々なリズムを提示させることにより、それぞれの生徒の能力、あるいは嗜好、興味に合わせた「個」を重視しての実践が行われた。同時にそれは、歌唱とリズム打ちのグループに分けたアンサンブル、すなわち「合わせる」活動も取り入れ、一つの題材を多角的にアプローチする複合的な学習の実践でもある。

以上のように、一つの楽曲を歌唱活動、創作活動、リズム打ち活動、アンサンブル活動、指揮活動など様々な課題を複合的かつ有機的に組み合わせた内容であるとともに、自国以外の文化を反映した外国の楽曲、アメリカの黒人霊歌を取り上げることにより英語教育との関連性を持たせることで、同州の教育カリキュラムのギムナージウム７年生において学習する内容[11] に示されている「異文化の生活の中の音楽 "Musik im Leben anderer Kulturen"」および「宗教的音楽 "Religiöse Musik"」を採用した授業が展開されていた。

（2）10 年生の歌唱の授業[12]

当授業は「音楽史」を扱い、ギムナージウム 10 年生の学習内容[13] 「宗教音楽 "Hymnische Musik"」に基づいた「宗教改革と音楽」を主題とした授業である。訪問した 2017 年は宗教改革の 500 周年記念の年であり、ドイツ各地で様々な学会、演奏会、イベントが行われていた。特に、10 月 31 日は「宗教改革記念日」であり、訪問日はその直前のことであった。授業者ミヒャエル・クラウエ氏によれば、「このような内容は通常も取り上げるが、本年は特に宗教改革 500 周年ということでより身近に感じることができ、また、家庭や

8 日本の中学１年生に相当する。

9 巻末資料（譜例１）を参照。

10 巻末資料（譜例２）を参照。

11 Ministerium für Schule und Berufsbildung des Landes Schleswig-Holstein, p. 21

12 日本の高校１年生に相当する。

13 Ministerium für Schule und Berufsbildung des Landes Schleswig-Holstein, p. 22

地域社会など周囲でも宗教改革やルター派について見聞きすることも多いため興味を持つ生徒も多い。」とのことである。特に、北ドイツはルター派の信者およびその教会も多いため、音楽でもルター関連の演奏会が開催されている。

当授業では、ミサ曲が題材として用いられ、その主たる構成曲であるキリエ "Kyrie"、グローリア "Gloria"、クレド "Credo"、サンクトゥス "Sanctus"、アニュス・デイ "Agnus Dei" について鑑賞の授業が２時間構成で行われた。まずは、教会音楽の歴史についてその成立や発展を中心に概略を提示し、続いて、「三位一体」を象徴する３拍子を示す音部記号[14] に焦点を当て楽曲分析を行い、その時代背景と音楽様式について学習した[15]。さらに、平和の賛歌アニュス・デイ "Agnus Dei" を題材とした際は、その歌詞に含まれる "Dona nobis pacem" 「われらに平和を与えたまえ」を意味するラテン語の語句を取り上げ、多様な文化および宗教などへの理解、そして外国語教育としてラテン語の文法に触れるなど、様々な視点から宗教音楽について理解を深めた。本授業を通して、教師は諸教科との関連性を念頭に置き、題材に関する発問を様々な切り口から投げかけ、生徒に疑問を持たせ「考えさせる」ための多様な動機づけと問題解決意識を持った授業を展開した。また、教師からの発問のみならず、学習者同士の対話を通して新たな課題を発見させることで、協働的に学んでいく環境づくりが授業で実現されたと考える。

ある物事に対して、知りたいという知識に対しての欲求、つまり知識欲を刺激することが教育の根本である。「教育」というのは、日本語では「教え育てる」であるが、ドイツ語では "Erziehung" という言葉がある。これは、もともと "er" が「外へ」という意味の接頭語であり "ziehen" が「引き出す」という意味である。すなわち、生徒それぞれに内在する目に見えない可能性を外へ引き出すことが本来の「教育」である。教え育てるという言葉からは、教師の立場から教授するというニュアンスが強く、実際の日本の教育においてもこのような考えは根強いが、当該授業は、本来の "Erziehung" の立場に立ち個人の可能性や能力を引き出す「アクティブラーニング型」授業の一例であると言えよう。

３．課外音楽活動の実際

ドイツにおける課外音楽活動について、前述のムジークシューレ「アーレンスブルク音楽学校」における取り組みを概観する。同音楽学校が位置するシュレスヴィヒ=ホルシュタイン州においては、音楽学校を運営するための施設借用費は無償であり、さらに、アーレンスブルク市よりの助成を受け、レッスン代や楽器借用費などの個人負担を低く抑え学びやすい環境を構築している。その運営および支援体制は非常に整っており、課外教育活動の充実を図るためにギムナージウムのような学校教育施設との連携は非常に重要である。

同音楽学校ではピアノを始め、声楽、管弦楽器のレッスンの受講が可能である。教師は、ハンブルクとその周辺の各専攻の専門家が指導にあたり、シュトルマーン学校の施設やピアノなどの備品を用いてレッスンが行われている。また、受講生の中には後述のユースオーケストラに参加している者も多い。

（１） 器楽（ヴァイオリン）レッスン

今回は、ヴァイオリンのグループレッスンおよび個人レッスンを見学した。最初の受講生は、８～10 歳の初心者３名のグループレッスンで、まずは全員でレガート、スタッカート、ピッチカートなどの基礎的奏法の練習を行った。次に、Holzer Rhimberg 社の弦楽器のための教則本 "fiedel Max" シリーズの "Der große Auftritt Vorspielstücke für Violine" を用いて、主旋律および伴奏型のグループに分かれて演奏練習が行われた。また、ピアノ伴奏と合わせたレッスンも展開され、他と合わせるアンサンブルを経験することで専門性の向上を図っている（写真１）。

---

14 キリスト教において「３」は完全を表す数字であり、完全という概念を形で示した「○」を３拍子の拍子記号として用いている。

15 巻末資料（譜例３）を参照。

写真１：ヴァイオリンレッスン風景

最後は、手遊びうたを用いたリズム打ちなど多様な活動を取り入れ、楽器の演奏技術習得のみならず幅広い音楽表現活動を行なった。

続いて、16 歳の個人レッスンを見学した。年少者のためのグループレッスンでは、教師は常に生徒に問いかけ、話し合い、意見を言わせる、ということを行なっていた。また、その答えをもとに次の活動を臨機応変に行うなど、受講生に「考えさせる」ということに重きを置いていた。例えば、教師が生徒に「教える」という形だけではなく、生徒たちに考えさせ、意見を持たせ、それに対して裏付けとなることを言葉で言い表す、ということを重視しているのである。すなわち、器楽レッスンの場においても個を尊重する姿勢が非常に印象的であり、ドイツにおいて、「考えさせる教育」は「アクティブラーニング」の一環として位置づけることができ、器楽レッスンにおいても実践されている実例が確認できた。

（2） アーレンスブルク・ユースオーケストラ

アーレンスブルク・ユースオーケストラ "Jugend-Sinfonieorchester Ahrensburg" は３つの下部組織を有しており、年齢と団員の能力により初心者、中級者、上級者（シニア）に別れている[16]。それぞれの練習について、水曜日は、「弦楽器子どもオーケストラ "Die Streicherkids"」（５～12 歳）および「水曜日オーケストラ "Das Mittwochorchester"」（11～18 歳）、金曜日は「金曜日オーケストラ "Das Freitagorchester"」（９歳～13 歳）と別日程で行なっている（写真２）。

写真２：水曜日オーケストラの練習風景

団員は、総勢でおおむね 150 名を超え、その中で上級者組織は約 80 名であり、卒団生の中にはプロフェッショナルプレイヤーになった者もいる質の高いオーケストラである。初級者オーケストラは、５歳程度から 10 歳程度を対象とし、弦楽器、管楽器の個人レッスンを受講する者の中から入団していく。ある程度能力が向上し指導者の判断で中級、そして、おおよそ 13 歳以上を対象とする上級者オーケストラに入団するという形式をとっている。

上級者オーケストラは、ハンブルクを代表するコンサートホールである「ライツハレ "Leitz Halle"」で毎年定期演奏会を行っている。その他、ハンブルク周辺の教会での演奏会、あるいは、教会合唱団との共演など、年に数回の演奏会を行い、特に地域社会との結びつきを重視した活動を展開している。

さらに、諸外国との親善交流を積極的に行なっており、これまでに日本（2008 年）を始め、イギリス（2002 年）、アメリカ合衆国（2011 年）、ウクライナ（2010 年）、中国（2013 年）など各地で演奏旅行も実施している。同時に、諸外国からのユースオーケストラを受け入れ、親善演奏会なども数多く行なっているが、日本からはこれまでに、埼玉県立大宮光陵高等学校（2006 年）、多摩ユースオーケストラ（2009 年）、兵庫県立西宮高等学校（2010 年）が訪問し、親善演奏会やホームステイプログラムを実施している。

16 https://www.jsoa.de 参照。

この中で、一例として同オーケストラの創立 40 周年を機に開催した日本演奏旅行について紹介する。2008 年 7 月 21 日から同月 28 日の日程で、沖縄、静岡、千葉、東京を訪問し、現地の幼稚園高等学校や市民オーケストラと共演し、沖縄、静岡、千葉ではホームステイを行なった。（表１）

表１：日本演奏旅行の開催日程

場所	共演	会場
沖縄（読谷村）	読谷中央幼稚園、のぐさ保育園	村立鳳ホール
静岡（富士宮市）	静岡県立富士宮東高等学校管弦楽部	富士宮市民文化会館
千葉（船橋市）	千葉県立船橋高等学校管弦楽部	習志野文化会館
東京（多摩市）	多摩ユースオーケストラ	パルテノン多摩小ホール
東京（小金井市）	東京学芸大学管弦楽団	学内芸術館

各訪問地で大きな歓迎を受け、高等学校、大学オーケストラ、高等学校卒業生との共演では、極めて質の高い演奏を披露すると同時に、同世代の若者との親善交流を行うなかで互いの文化や生活について理解を深め音楽を通じた「文化親善使節」の役割を果たした。

また、沖縄での演奏では、読谷村の幼稚園および同系列の園の園児との共演し、合唱曲の伴奏や合奏を一緒に行うなど、単独演奏以外でも高い評価を受けた。

このように、同団体は単に音楽芸術の探究だけではなく、音楽を通じた文化親善交流、また異文化背景を持つ若年層に対する相互の音楽を通じた国際交流を目的としていることは特筆に値する[17]。

４．総括

本稿は 2017 年 10 月に実施した視察報告であり、授業内音楽教育および学校施設を利用した課外音楽教育における取り組みの一例を示したものである。

今回の現地調査で最も印象的なのは、授業の中で、一つの素材を元に様々に繰り広げられる有機的な音楽的活動である。これは、1980 年以降のフランスで行われている「フォルマシオン・ミュジカル "Formasion musical"」の発想にも近いと言える[18]。「フォルマシオン・ミュジカル」とは、一つの素材、楽曲、例えば歌唱曲を用い、聴音、リズム打ち、弾き歌い、クレ読み、音楽史、楽曲分析、創作など様々に細分化された課題をこなしていく内容である。ドイツにおける授業の形態が直接的に「フォルマシオン・ミュジカル」より影響を受けた、という記録は見いだせないが、ドイツにおいて音楽教育の場でこうした実践が行われていることは大変興味深い。しかし、楽曲を「ただ歌い、音楽の喜びを享受する」といった形の音楽へのアプローチではなく、その構成を理解し、創作し、アンサンブル（合唱ではなく）を行う、といった形の取り組みも、日本における初等音楽教育には非常に有益であると考える。

ここで紹介した例は中等教育におけるものであるが、短期間で実践的能力を修得しなければならない短期大学の保育士養成課程における音楽を通じた諸活動にも、効果的に取り入れることができるであろう。今回のような複合的な音楽活動を経験することは、学生にとっての音楽へのより深い興味を喚起させることが期待できる方法であり、幅広い音楽表現活動を展開できる有効性あるものである。今後、このような事例をさらに調査し、引き続き諸外国の初等音楽教育の取り組みを研究していくことにより、保育あるいは教育現場において、より実践的な音楽活動を行うための糸口を提示していきたい。さらには、本学における音楽教育の体系的な授業内容を構築するための道筋をつけていきたい。

17 指揮者クラウエ氏へのインタビューによる。(2017/10/12)

18 藤山あやか（共著），「初等音楽教育のためのソルフェージュ ～読譜練習を中心に～ 」，愛媛大学教育実践センター紀要第 34 号, 2015, pp. 41-48

本稿は、滋賀文教短期大学の研究費を充当して実施した海外研修に基づいた研究である。ドイツにおける研修では、シュトルマーンギムナージウムの音楽教師およびアーレンスブルク音楽学校代表ミヒャエル・クラウエ Michael Klaue 氏、シュトルマーンギムナージウム音楽教師カティヤ・クアザーベ Katja Kursawe 氏、アーレンスブルク音楽学校ヴァイオリン講師フラウケ・ポールマン Frauke Pohlmann 氏に多くのご協力とご助言をいただいた。ここに深く謝意を表したい。

子ども学科・助教（音楽教育学）

参考文献：

伊藤真,「ドイツにおける音楽科教育に関する一考察（5）- 音楽科と他の諸教科との関連性に着目して -」, 広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要第 19 巻, 2007, pp. 35-43

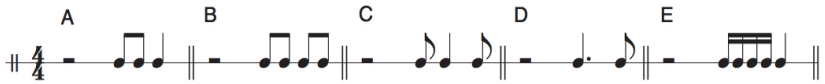
卜部匡司,「三分岐型から二分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変異」, 広島市立大学国際学部広島国際研究第 22 巻, 2016, pp. 131-141

文部科学省国立教育政策研究所, 独立行政法人国際協力機構地球ひろば,「グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査第 1 分冊第 4 章」, 国際開発センター(IDCJ), 2014

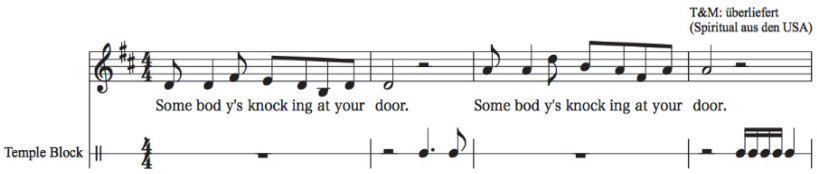
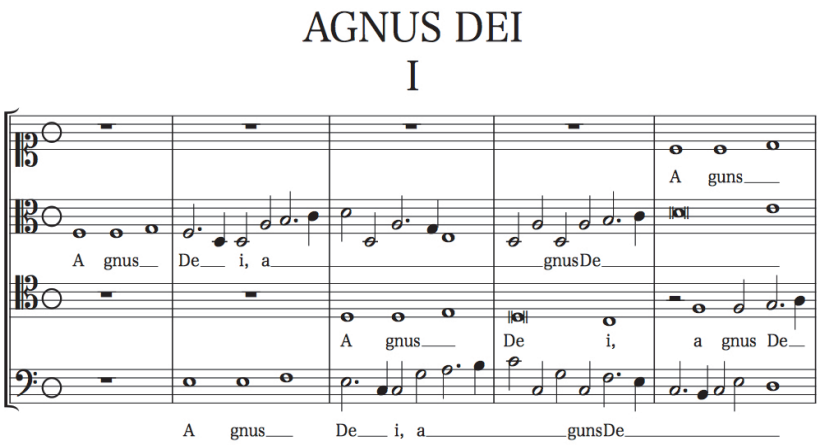
Ministerium für Schule und Berufsbildung des Landes Schleswig-Holstein, "*Fachanforderungen Musik Allgemein bildende Schulen Sekundarstufe I*", Kiel 2015

巻末資料：

譜例１：生徒から提案されたリズムパターンの例



譜例２： "Somebody's Knocking at Your Door" を題材としたリズム



譜例３：聖歌の３拍子